
End Roll とコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End Rollとコンティニュー

【Nコード】

N4559Z

【作者名】

タナカ

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというチャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きてるときに大きな間違いか罪を犯したようです。こちらは身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだか罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

気付いたら草原にいました（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもっているわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました

俺、白雪燕斗^{しらゆきえんと}は、死んで、何故か美しい大草原に囲まれた花畑に来ていた。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数えろ。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだっけ？ いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやってこの夢から覚めることか、だ。はい夢！ はいこれ夢！ むしろ夢じゃなきゃ困る。歩いててバスが突っ込んできて爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚めろ。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくつと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？ なんて俺声かけられてんの？ はは、まさかこれ神様っていうやつ？ ははは、まっさかー？

おそろおそろ振り返る。そこにいたのは軽そうなホスト風の男。シルバーアクセサリーを首やら手にじゃらじゃら巻いている。全体的にチャラ男にしか見えない。

よかった、お約束みたいな展開じゃなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言ってるんですかなわけないですよー。こんなの俺の夢に過ぎないんですから。そうそう、夢じゃなきゃいけないんですから」

「現実逃避も甚だしいよー？ はつきりと事故の瞬間覚えてるんだから諦めな？ 人生諦めが肝心って言うじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりゃいいんだああっ！！！！！」

「まあドンマイ」

「うっぜえええええっ！！！！！！！！！」

きらり、と白い歯を見せてくる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かった。

「美少女の神様は今別件で仕事中的なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ…、あれ？ なんで今考えてることわかったんですか？」

「そりゃあ神様だもの」

「…だからこれはゆ」

「夢じゃないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思ってる？」

シビアなことを言われました。笑顔で、俺にとって全力的に絶望的なことを言われました。

「…本当に？」

「本当に」

「まじで？」

「まじで」

「…現実」

「まあ現実だね」

「……俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく」

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白昼夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買い物をしようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかという、理由は簡単。母親がいなかったためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残ったのは自分だけ。初めは姉がやっていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているの、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらてくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をして

いて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れていく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かって突っ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかった。テレビのスイッチを切るように、俺の意識は途切れた。

回想終了。

「……」

「どう？」

「現実か」

「うん」

「……今日の夕食どうしよう？」

「混乱してるね」

親父達ご飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だろうけど材料あつたっけ？ 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういえば牛乳がなかった。姉貴は朝いつも飲むから買ってたないと思っから、豚肉のほうれん草和えが出るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来……てほしい。

「……そもそも君もう死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの？ ……俺としては早く説明に移りたいんだけどな……、

「これからのことか」

「これからって…、俺に『これから』はないでしょうよ」

「そういうわけでもないんだよね…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？ 困った顔をしている自称神。どうしたことだ？ と俺が問うようにじつと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかったんだ」

どうしてだかわかる？ と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろ
うね、と神は眉を八の字にして笑った。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償われていくものなのだけど…、君は途中で死んでしまった」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。

待って、待ってくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言う。俺はいたってクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなければ学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつつち、そういうわけでもないんだよね…。大罪こそが人の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかったの

に、なんの因果か命を落としてしまった。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ」

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじゃん。悪いこととした覚えもないのに…、どういうことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのさ」

「……は？」

間拔けな声二回目。

一瞬耳を疑った。何言ってるんだこの人。転生って…転じて生まれる？ はい？ ホワッツ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまったからね、違う世界で新たに生きていくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしわからないことがあったら教えにいける。なんてったって俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんですけど。ちょっと待て…、転生って…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふっ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さっきも言ったように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きているうちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまった…」

「あ、待てよ…？ もし、俺にそんな間違い？とかがあったとして、こうやって転生する必要があるんだ？ そこまでして、償う？ ……なんで？ 俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「そうさ、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさ

え出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある」

そこまで真面目な顔で言ってから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑って俺を見た。

しやらしやらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいさ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出されること。新たな人生をエンジョイしようか！　みたいな感じでさ？」

「…かつるいな…」

「重くても困るっしょ？　まあ転生先なんだけどね…、ねえ君、フアンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「…は？　そりゃあ冒険者とかモンスターとか…」

「うん、つまりそこ行くの」

「……………は？」

「さってねー…それと…」

「待て。おい待て。すぐ待て。はい？　どういうこと？　今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」

「は…はい!？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにちゃんと読み書き完備だよ？　まあゆっくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！　え、俺そんなフアンタジーなどに行くの決定？　まじで？」

「まじでー」

「かつる!？　俺のこれからの先の人生すぐかつるい調子で言われた!？」

「いや、こういうのはノリで突っ走っちゃった方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええっ！？」

こいつ恐らくすっげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがった！？本当に神様がこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…？」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思ったら大間違
いだからね？」

「どちくしょうが！！」

そうだよな！ そんなご都合設定あったら苦労しないか！ 無理で
すよね！

「君の目的は自分の過ちに気付くことだからね…、もし気付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか」

「…なんだよそれ」

「そもそも世界と言うのは別次元のようなものだからね。早い話三
次元と二次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が二次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もう説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていくことを逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかさ、君ももとスベツク割と高くない？ ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強く、勉強はそこまで出来るわけじゃあないけど頭の回転は速いし。本当にア充爆発しろとか思われてるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか」
「…」
「そういうわけでもないよ？」

「…そういうわけでもない？ 俺は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？ そもそも世界自体が違うんだよ？ 星が違うとかそんなんじゃない、そもそも次元が違う。つまりさ、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまったく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合う。そうさ、君にとつての異世界なのだからね」

「…世界が、」
「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「……」
「…どうしたの？ さつきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言ってるけどさ、結局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「……………、うん」
「どちくしょうがあああああつ！！！！！！！！！！」

自称神が言うには、言語能力と魔力核だけはあちらと同一のものとする、らしかった。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方

はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということとでその魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしれないし、普通の人と同じようになるかもしれない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知ーらねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾に をつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけど。

「まあ、そろそろお話も終了かな？ さて、君を違う世界へと転生させるよ。…あ、面倒くさいからこのままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そうそう転生してくる人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

目覚めたらやはり異世界

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなっていく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなっていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと感じた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶっん、とりモコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、親父も姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろう』、と。

…守れてねえじゃん。俺死んじやったじゃん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するようになった。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思っていた。

親父は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあった。けれどそのたびに体が強化されていつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度か迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。このフラグメーカーだ。まあ、親父は母親一筋だったらしいけど…、って話逸れた。

つまりそんな親父の様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。親父みたく、家族を守るように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやった。…最近はおもしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに親父を見習って、少なくとも変な輩からは大事な人を守るように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れたけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入っていた。ここだったら運動も出来るし、走ることでいいしそこまでお金もかからないと思っただからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなく走ってただけなのになぜだ！？　ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言っていた高スペックというのは、全て家族のために頑張ったものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありえますか？　今頃親父と姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていってしまったし、もう守れない。そう思うたびに泣きそうになった。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなのだ。親父、姉ちゃん、死んじゃってごめん。

自称神が言っていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だってそうだろう？　こないつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、親父達の元へと生まれることは出来ないと思うけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあったのだ。

死んだ母親のぬくもり。親父達の笑顔。友人達との騒ぎ声。今考えると、それはとても大事なものだ。早く、早く帰り

たい。

帰りたいんだ、俺は。

$$\vdots$$

目を開けたらそこは、先ほどまでいた草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。

ざわざわと、普段は聞きなれない森のさざめき。空気も澄んでいて、息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだった。

…ビバ・異世界。

はいはい俺落ち着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ち着け落ち着け落ち着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸って、吐いて、吸って…ほら、気分が落ち着いてきただろう？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…

「どこだここはあああああああああああ！……！！！！！！！！」

……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通感覚ならこうなってもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱり現実…？」

試しに頬を抓ってみた。痛かった。現実であり夢じゃない。

自称神に言われてたことだったが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。

見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。

…まじでか。

うわあああ…と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのときに、ふともぞり、と動くものがあるのに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

…え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言っていた。でも、いきなり？ 俺倒せると思えないんだけど？

ぎぎぎ…と油の差してない口ボツトのように振り替えると、そこには白い着物のようなもの見えた。

「は…？ 人…？」

気を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えはいいのか？ つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。その瞬間、自称神の言っていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。
多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、下のほうで縛られていた。

…日本人、なのか？ この衣装は和風っぽいんだけど…。
そう考えていると、その狩衣を纏った人間の瞳が、開いた。

「こんにちは」

「……？」 状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？ こういう場合は」

「……」 考え中。

「お前もあの自称神に会った？ あのチャラそうなの」

「……??」 混乱中。

「ところでここ異世界なのかな…、見たところお前も転生してきた人間だよな？」

「……！」 思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすっか…お前戦える？」

「……っ！！！」 思い出した。

「…どした？」

「ここ本当に異世界！！！？」

「あ、やっぱりお前俺と同じか」 平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうときコミユ力大事。…あれ？ 違う？ まあなんでもいいが、似たような人がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘…本当に来たんだ…。これは、喜ぶべき…？ いや、悲しむべきということ…？」

「おいお前なんていうの？ 名前」

「え、へ、な、名前？ て、ていうか何でそんな落ち着いてられるの……」

「いやさっき散々驚いたけど……」

そりゃあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。

見た目ではあまり見分けがつかなかったがどうやらこいつは男らしい。瞳は俺と同じく黒色だった。なんだ、普通に日本人っぽい顔立ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？ ……俺はそんな名前じゃないよ、忌月^{きげつ}、それが俺の名」

「…日本人じゃない…？ 苗字は？」

「苗字？ そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶^{かや}の国、列峰^{れっほう}領の治める……」

「もういい理解した」

こちらと違うファンタジーなのか。

目覚めたらやはり異世界（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出会いました

「…それで、これからどうしようか」

忌月と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてるうちにどうやら同年だったということがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のことを話し合おうと口を開いた。

「あのチャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちゃ、ちゃらお？」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様？ 神様は女だったよ？ しかも綺麗な人だった」

「…なんですと!？」

「ま、まじで!？」

「え、食いついてくんの!? あ…ああ、なんか『別にあんたのためなんかじゃないんだからね!』って言われた」

「つ、つつつつつつツンデレ…だと…!!! 俺のところはあの自称神とかいうチャラ男だったのに!? 理不尽だ!」

「あれ? でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか…。まさか…」

「お前か! お前の方が! お前の方に行ってたからこっちに來なかつたのか! 謝れ! 全身全霊をかけて謝れ!」

「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒ってんの!？」

「ちくしょう…! 俺だって美少女の方が良かったさ…! あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよと言われて腹立たないとかおかしいだろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気に入らなかつたわけだ…、って俺に八つ当たりすんな！」

「しなくちゃこの荒ぶる気持ちが抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実習のときに女子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだして、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃない？ と褒められて、女子には先ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。これでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もつと女子と…」

「しっ！」

さらにいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。はあ！？ と思わずその手をとろうとしたが、どうにも忌月の様子がおかしかった。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だった。イコールそれは周りに響くというわけ。しかも、この世界は、ファンタジー。言ってみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……っ！」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すなんてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がっていく。

ちくしょう、気付くべきだった。ここは異世界。ここのルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだからだ。…言い訳になるな、これ。

がさがさところちへ近づいてくる音がする。それは確実にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えてる。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見ると、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄って来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファントジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち&身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない少女？

は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしはそういうことに偏見など持たん、邪魔して悪かったのお…」

…ん？

ちよつと待て、俺達の今の体制を確認してみよう。

俺 先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌月の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌月 茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちつがああああ うー！ 俺はそんなアブノーマルな趣味
持ってません！ 違います！ 本当に違います！」

「は、え？ あ、あぶのーまる？ なんだそれ？」

「…なに？ おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは
…？」

「そんなことあるか …… 俺は女の子！ 女の子が好きなんです！」

「そう叫ばれても困るのじゃが…」

「ごめん俺理解できてない。誰か説明して」

さつぱりわかってない忌月は置いて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわかんないし、ここらへんに家ってないか？」

「わからない…？ ……ううむ…、おぬしら、わしのことわかっておるか？」

「ん？ なにが？」

「わしはこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゃぞ？」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ…」

「あ？」

「握手を！」

「……」

あれ？ 俺なに言ってるんだ？

……なに言っちゃってるんだ！？

……なに言っちゃってくれちゃってるんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女っ娘とか考えてないです！ 違います！ 萌えとかそんなのと違いますから！」

「……違うのか？」

……ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がつてるとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればここどこか教えてほしいんだけど……」

「お嬢さんではない……。ん？ ……なにやらおぬし、ぽっかり抜けたような力があるな」

「え、わかります？」

「……なんの話だ？」

話に入ってきた忌月を見たウェイブは、なにやら変なことを言う。

それをさらりと受け止め、むしろ理解してるような口調だ。

訝しげに見ていたのに気付いたのか、忌月が慌てて俺に教えるように言った。

「俺、死ぬ前は霊媒師だったんだよ」

………なんですと？

魔女と出会いました（後書き）

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

同じ転生者は霊媒師

「れ、霊媒師？　霊媒師って…、あの、霊とかなんやら被うやつ…？」

「そうだけど…君の世界にはないの？　俺のいたところじゃ、一般的な職業だったんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い！？」

「さ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思っても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないのだ。

それに忌月だって俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまったくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じゃないと。

それにどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているように見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おっと話がずれた。

「まあ、そういう『霊力』ってのが俺にはあつただけど、この世界に来るときにはすっぱり抜けたってわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしょうがないとは思ってたんだけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどっちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとって異質なものはない

ほうがいいだろう。目立つてもしょうがない」

「違う世界…？ やはりおぬしらこの世界のものではないのか？」

「え」

「え」

「…なんじゃその反応は」

「いやいやいや世間話のように言われましたよウェイブさん。俺と忌月は顔を見合わせる。」

「…わかるもんなの？ そういうの」

「普通の人間にはわからんじやろ。時間がたてばおぬしらもこの世界に染まるじやろうが、いかにも臭いが違う」

「に、臭い？」

「昔にもそういうものがおったからのお…、150年くらい前じゃろうか…」

「ひゃ、ひゃくごじゅうねんっ！？ お前いくつだよ！」

「ん？ 今年で324歳になるの」

「…っ！？」

なんてこつたい。300歳越え…だと…？ 確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？ まじか？ まじですか？

ちなみに忌月は、「だからそんなに口調なのか…」とかなんやら言っている。突っ込みどころがずれてるぞ。

「まあかなり珍しいことには違いなからな。特にその黒い目はあまり見かけん」

「やっぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりいど…？」

「そうじゃな。まあかといって珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？ …立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家にも来ぬか？ この世界のことを教えてやる」

「本当！ 助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前力タカナっばい言葉苦手だよな」

「かたかな…？ な、慣れるから！ そのうち慣れるから！」

忌月と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはあの自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違ったり、容量が違ったり、属性が違ったり…、ちなみに属性と言うのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合った属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合った、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず忌月に尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食ってたわけだし…、君のところじゃそういうのなかったんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女の人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかったのか！？」

「な、なんでいきなり怒るんだよ！」

「うるさいのう…、静かにしとらんとモンスターが襲ってくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけけど、どうも年が食い違ってるように見える。

なんとなくそう思っているとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通

魔女の家、といって、少々身構えていたのだが、そこはどうにもイメージと違って小奇麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあったのだが、壺は中身は入っておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だった。けれどきちんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のような。ウェイブが普段使っているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こっちじゃ、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだった。いや、日本と比べてはどことなく昔の外国？ ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座って待つておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こうちゃ…？ お茶、だよな？」

「なに言つてんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやって座るの？ 畳とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるようだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たようなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

畳と言ったけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろうか…、服装だってやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書でしか見たことがないんだけども。

ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に畳だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名称は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そついえば聞いてなかったけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなつて」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじゃないよ！　え、えんど…？　だっけ？　そつちはどうしたの？」

「エンドつてなんだよ俺終了しちゃってるじゃねえか」

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかったかもしれない。

「俺はトラックが突っ込んできてそのうえ爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりゃ…」

「食い違つてゐる気がするけど気にしないでおう」

カタカナはそのまま伝わっているわけか…、なんか言語能力があつちよりこつちのが高性能…？

「それは俺が有能だからだよー」

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確実に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝ってって言ったら手伝ってあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なことやってんのよ! べ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あんたの方が、仮に性能が良かったとしても、その、違って…で、出来なかったわけじゃなかったんだからあ!』

『うんわかってるよあ、だからほら、泣かないで』

『な、泣いてないわよ! か、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だったみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言っておくが俺はエンドじゃねえ。終了してねえから」

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言ってるから結局エンドになっちゃってるじゃねえか!」

人生終了して名前も終了ってか! 不吉じゃねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらも聞けい、ほら」

「…サンキュ」

「…この取っ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言う名じゃ。それでここは深海の森。この近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらはギルドに登録するがよい」

「ぎんど…?」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」
「わかるのか…? まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじゃ。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じゃな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるといのが一般的じゃ。簡単なものからそりゃあ難しいものまで山ほどある。そのどっちともに料金はもらえるからの。生活には持つて来いじゃ」

「仕事って、どんなのがあるんだ?」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじゃ、料理人募集のようなものもあるのう」

「料理! まじか!」

「そ、そんなキラキラした目で食いつくところかの…?」

料理なら持つて来いだ! 試行錯誤を繰り返し作り上げた究極の味噌汁からフグの調理(こっそり猟師さんにもらった本体丸々)を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度でも就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人にさえ感激させた。俺ははっきり言える。料理の腕だけはチート級だ。…まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じゃ。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんのう」

「え、そういうのわかるのか?」

「わしは魔女じゃぞ? そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと言うか…もともと合った『なにか』のせいかな魔力の質が特異じゃな。それにぽっかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのを望めるぞ？」

「…なのに貧弱じゃ。限りなく体力がないうえ力もない。走っただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？ 人の気にしてるところ突いちゃった感じじゃなく決っちゃった感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まっておる」

「え、そんなヘビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。…それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきておる。総合すると、まあぶっちゃけ あんま平和じゃない的な？ …ということじゃ」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやっておられん。まったく人間というものはどうしようもないものじゃ。今も魔物は増えてきておるというのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亜人やら獣人やらごっちゃか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん…戦争が始まったのは百年ほど前、魔物は増え始めたのは百五

十年ほど前じゃの」

「数年じゃねえ…、」

「戦争なんて下らんことしとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組めばいいと思うのじゃ、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「そりゃあ当人達にとつちやくだらないもんじゃないからなんだろうよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんなが掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからさ」

そんなことをなんともなしに言つたら隣に座っているいつの間にか生氣を取り戻した忌月が目をぱちぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「へえ、それは素晴らしくイケメンなんだろうな」

「いけめん？ …麺？」

やばい、だんだんこいつの言動面白くなってきた。

魔女の家は案外普通（後書き）

地名やらなんやらはクラシック曲から使わせてもらったりしています。

アストウリアス

アストウリアス（伝説曲）（西語：Asturias（Leyenda））は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、『旅の想い出』作品71の第1曲、前奏曲「伝説」（西語：Leyenda）として書かれた曲である。

イベリア

イベリア、12の新しい印象（フランス語：12 nouvelles impressions）は、イサーク・アルベニス最晩年のピアノ曲。

Wikipediaより。

修行しました

それから、ウェイブからたくさんのこの世界の常識を知った。

まずは暦。春の月、夏の月、秋の月、冬の月の四つがあり、一月は90日ある。春の月1日、と数えるらしい。地球では12ヶ月で一年だったから、それを聞いて思わず眉を顰めたが、一月が90日だということは30日分が三つ…、ということであればまあいいとおもう。合計で360日だし、そう思えば割と近い。

それからモンスター。予想通りゴブリンとかオークとか有名どころがうじゃうじゃという。俺の聞いたことのないモンスターの名前もあつたがそれもやはり異世界。異世界だといつても世界は世界なのだ。知らないことがあつたって仕方がない。

「おぬしらが一歩進めばいいんじゃないが、しばらくここで修行せんかの？」

「へ、どうしたいきなり」

「いや、まだこの世界に来たてであまり力の使い勝手がわからぬじやろう？ 都合のいいことにおぬしらにはおぬしらなりの知識が豊富にあるようじゃし、案外強い魔術師になれるやもしれん」

「え、俺ら、魔法なんて使ったことないんだぞ？ なのに大丈夫なのか？」

「それに強い人って小さい頃から鍛えてるもんじゃ…」

「いいや、そんなのは考え方一つ、戦い方一つでどうとでもなるわ。魔力が少ない人なら少ない人鳴りの戦い方があるように、誰しも得意不得意があるように、確かに経験がないのは厳しいが、おぬしらにはおぬしらのことは一風変わった考え方、想像力があるじやろ

う？ それにわしが鍛えてやると言っておるんじゃ。いたずらに大魔女と呼ばれておるわけじゃない」

「…まあ俺にとっちゃ願ってもない誘いだけど…、いいのか？」

「構わん。近頃は退屈しておったしの。それにおぬしらは…面白そうじゃ」

「？ どういう意味だよ」

「そういう意味じゃ。よし、まずはだいたいのモンスターの知識を詰め込まんとう…」

「え、俺勉強嫌い」

「俺も？」

「おぬしは体力づくりじゃ。せめて一般人には追いつけ。おぬしは記憶力がよさそうじゃから本さえ渡しとければいいじゃろ。魔物払いの結界をしておくからまずは十周ほど走ってこい」

「……俺に死ねと？」

「どんだけ体力無いんだよお前」

つまりそんなこんなで、大魔女さん、ウェイブとの修行が始まった。先ほど台詞の中に登場したが、俺は勉強が嫌いだ。自称神には頭の回転が速いなどと褒められたが、勉強は本当に苦手だった。

成績は下から数えた方が断然速い。情けないことだけれど、つまり、そういうことだ。…馬鹿なんです。すいません。

一方の忌月は、確かにウェイブの言った通り本を貰い、ただ読んでいるだけで簡単に覚えていた。だけど体力がおかしい。なんで十メートル走っただけで息切れするほど疲れるんだ。そのうえ顔も青くなるし今にも倒れそうだし、正直ここまでとは思わなかった。

十日間はお互い苦手分野のことに徹し、ひたすら努力をした。さすがに俺だってサボってられないことはわかってる。下手したら死ぬのだ。そういう危険が常に纏わりついている。

ギルドに登録せずに働くことはダメなのか、と聞いたことがある。

身分証明書はすっぱり諦めて。そうしたら、『どこから来たものかさっぱりわからぬ奴をそうそう雇えると思うか?』などと返された。確かに俺達にはもう家族いない。いや、生きているのだけれどこの世界には存在していないのだ。それに今頼れるのはウェイブただ一人。だけれどこの魔女が住んでいるのは森の奥深く。しかもなにやら『恐れられた存在』らしい。なんだか魔女らしい噂だ。つまり後ろ盾と言うものが存在しない。いきなりぱつと現れたこんな怪しい奴を雇ってくれるのは相当人の良い人間らしい。じゃあそういう人を探せば、と言うと、『そんな人におぬしは頼れるか?』と。…無理かも。まあギルドには登録するつもりだったし、一応聞いてみたただけなのだけれども。

十日たつところには、忌月が一般人並みの体力になっていた。それに俺はすごく驚いたが、ウェイブがあつさり答える。

「自力じゃもうほぼ無理だったから、魔法でぎりぎりまでそういう筋肉などをあげて、それからトレーニングさせたのじゃがそれであれがもう今出来る全てじゃった」

…通りで落ち込んでるんですね忌月さん。隅で体育座りをしており、背中には暗雲を背負っている。なんとか忌月を立ち直らせてウェイブから今度は『魔法』について学ぶ。

魔法というのは、前にウェイブが言ったとおりそのまま、イメージして錬った魔力を詠唱で形作る、という感じだ。本に記されているようなものがたくさんあり、オリジナルで創作できたり、魔法と言うものは無限の可能性を持っている、という話だった。

まあだが、オリジナルで魔法を作るとするのは難しく、確固たるイメージを持ったうえに魔力も大量に消費するらしい。まあ初めて使うものだからそういうものだよな。

「…魔法というものは感情に連動したりする。これは気をつけなければいけないことじゃ」

ウェイブが真剣な顔立ちで言う。

「例えば怒りで我を忘れるときがあるじゃろ？ あれは酷く危険な状態なんじゃ。そんな感情から魔力のバランスが崩れ、増幅する。それが放たれれば、相手どころか自分も傷つく。十分用心するんじゃないぞ？ …まあ人の心はそう無理矢理制御できるもんじゃない。じやが、ちゃんとそれは覚えておれ」

それからまた数十日がたった。

ウェイブの元で身を守るだけの力と魔力を蓄えた。魔力はどうやら自然に体力が回復すると共に溜まっていくらしい。うまいものを食べても補給される。そんな簡単なものなのか…と半ば呆れたりもしたが。

魔法も使えるようになった。俺はどうやら異常に器用らしく、案外簡単に出来たので俺自身が驚いた。ちなみに忌月は、元いた世界で使っていた力とどこか似ているらしく、こちらも簡単に出来た。…そんなんでいいのか？

忌月は霊力？の際に使っていた術を試そうと一人でいろいろやっていた。それを見て俺自身もオリジナルのやつ作ってみよーかな、などと考え、別々に修行していた。

なんとなく、俺は焦ってたのかもしれない。元の世界でまた生まれるため、俺の、『間違い』か『罪』を探す。力をつけた先に、何かがあるんじゃないかと。

そして、俺達は今日、魔女、ウェイブの家から出る。

別れと出会い

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ、心配すんな」

「…いつでも来てもいいからな？」

「ありがとう、困ったらまたここに帰ってくるよ」

俺は帰る、という言葉に変えてウェイブに告げる。すると、寂しそうなウェイブの顔が少しだけ緩んだ。

今日までの間世話に会って、最初に出会ったこの世界の人間がウェイブでよかったと心から思っている。多分忌月も同じ気持ちだろう。こちら眉を八の字に下げて、少し寂しそうだった。

「ウェイブさん、本当にありがとうございました」

それでこの忌月、少しの単語なら発音できるようになっていた。どうやら言葉関連は記憶力がいいはずなのに苦手らしく、覚えるのにこずった。ウェイブの名前はちゃんと言えるようになってたが、いつの間にか忌月は俺のことを『エンド』と呼ぶようになっていた。…いや俺まだ終わってねえし。一回終わったけど転生したし。いくら言っても直らないのもう諦めたのだけど。

「それじゃあ行くな。本当にありがとう、ウェイブ。今度お土産もって帰ってくるからな」

「絶対じゃぞ？ 絶対じゃからな！」

「はい」

「じゃあ、行ってきまーす！」

俺と忌月は歩き出す。時折振り返りながら進むけれど、ウェイブはずっと、手を振っていた。…本当に、彼女と会えて、すごく幸運だったんだなあ…としみじみ思う。

森をずっと進み続ければ、やがて木々の量も少なくなってくる。その間に体力のない忌月は何度もバテたりしていたが、とりあえず応援だけして歩かせた。

ウェイブが言っていたのだが、忌月の体力は一般的な女性ほど…らしい。それを聞いてさらに泣きそうな顔になり、「一般的は一般的でも、体力の無い部類の一般的じゃ」、とさらに追い討ちをかけられ、本気で落ち込んでいた。なんていうか傷口に塩どころかタバスコかけた感じだあれは。可哀想過ぎて俺も若干涙目になった。元はどれだけ体力がなかったんだよ。

「ギルドに入ったらどうする？ 俺らでパーティ組むか？」

「え、ぱーてい？ …ぱーていぱーてい…パーティか。組んでくれる？ 世界違って一人じゃ心細いし、あんま異世界人だってこと喋ったらダメって言われたし…」

「ま、気楽に行こうか。まずは慣れといった方が身のためだし」

「うん、わかった。これから頑張ろうか」

「ああ」

「死なないようにね！」

「…笑顔でそんなこと言うな、悲しくなる」

そうだよな、死んでこの世界に来たんだよな…。あの時はトラックがすごい勢いで突っ込んできたから怖いと思う暇もなかったけれど、今となっては思わず身震いする。もうあんなのは勘弁してほしい。

歩いているうちに木々の生い茂った森を抜け、大きな平原に出た。そしてその道の先に街が見える。あそこがイベリアか。俺と忌月は

顔を見合わせた。
さあ行こう、とまた足を踏み出した。

「きゃあああ

!!!!!!!!!!」

…ホワイ？ 淑女の悲鳴が？

俺と忌月同時に足を止める。それから恐らく声の聞こえる方である左方向を向いた。

「そ、その人たちいー！ た、助けてー！！」

走ってくるのは、長く、ところどころはねた、銀色のウェーブした長めの髪を持ち、蒼色の瞳をした白い肌のいわゆる美のつく少女。
うん、ここまではいい。

「…エンド、あの女の子の後ろからやってくる大量の犬はなんだろうか」

「モンスターだな」

「物の怪けですね、あの犬。…確か、ぶらつくどつくとか書いてあった。人襲うとかも書いてあった」

「…んで、あれ襲われてる状態だよな？」

「うん」

森出ていきなり戦闘？ どんな強制イベントだよ。正直言うと戦うというのはあまりしたくない、けれど、…助けないって選択肢は初めからない。

どれだけ今の俺達が通用するかもわからないけど、放っておけない。

それは忌月だつて同じようだ。

「おい！ 早くこつち来い！」

「は、はいいー！！！」

黒い犬達が女の子をすごい勢いで追いかける。俺はそんな凶暴な犬……モンスターに追いかけられる女の子の方に走る。

武器も何も持っていない俺が特攻してくるのに女の子は大きく眼を見開いた。

「き、危険です！ 素手で敵うような相手じゃ……！」

「わかつてる！ 数があればあるの恐えし、まだ俺よく戦い方わかつてねえから戦わない！」

「はい？ どういう意味ですか……？」

俺は女の子のところまで近づくと、そこからぐん、と加速し、女の子の腕を取り、また走りだす。

忌月に目線でなんとかするように頼んでみる。すると忌月は露骨に困った顔をしたが、それでも頷いた。

「は、速い……」

「走るのは自身があるんでね！ ……ああもうまどろっこしい……！」

「はい……？ うひゃっ……？」

俺は引つ張って走るのが面倒くさくなり女の子を抱き上げた。走るのがあまり速くなかったので行ったことだったのだがこれってセクハラにならない……よな？ 女の子は真っ赤になってたけど走りすぎて疲れたのだろうか。そう考えると、走りまわさせたあの犬達に怒りがわいてくる。

「忌月！」

「りょーかい！」

戦うつもりはない。勝てるかどうかわからないし、数があの量だ。魔法が使えるようになったからといって、威力もいまいちよくわかっていない。もし逆効果になったら最悪だ。だから確実な手段。

「【煙玉】！！」

忌月の振上げた手に小さな魔方阵が浮かび、そこに靄がかかったような球体が出来上がっていく。

前の世界で生きてた頃に使っていたらしい術。…いや今は魔法か。魔力と霊力の使い方が似ていたらしいのでいくつかは出来たと言っていた。その中の一つ。

いくらモンスターだといっても犬型だ。確かブラックドックも、その眼より鼻に依存している。それを利用した術、…じゃなくて魔法。

ちなみに出来たと教えてもらったときの会話。

『エンドー！ 煙玉が出来たんだ！』

『へーよかったな…、煙でんの？ 消臭効果とかけれん？ 部屋

干しは臭いがな…』

『…出来ないこともないけど、なんでエンド洗濯干してるの…？』

あのときの俺グッジョブ。忌月に変な目で見られたけど気にしない。忌月の放った魔法は俺達とブラックドックの間に落ち、ばふんつという大きな音と共に広がる。

目晦まし用の白い煙がもわぁ、と立ち上りブラックドックを覆い隠す。ブラックドックは先ほども述べたように、辺りを把握するため

に眼よりも鼻に依存している。その鼻が使いようもなくなったら、その動きを止めるようだ。

「忌月！ お前も早く来い！ 街の方へ走るぞ！」

「は、走るのっ！？」

忌月が絶望的な声で叫んだが気にしてられない。俺は女の子を抱えたままイベリアの街に向かって走った。女の子を落とすといえないので、加速はあまりしない。

忌月の弱々しい声が聞こえたが、気にせずに走り続けた。

ギルド登録できました

「あ、あの、ありがとうございます！……！」

なんとかブラックドックの群れから逃げて、イベリアの街のその前の道でようやく足を止めることができた。

俺はもともと体力あつたけれど、忌月の様子が誰から見ても可哀想な状態だつたけれど今はスルーしておく。

「わ、私はセフィル・トールリックと申します、こ、このご恩は一生忘れません！」

「そんなに重くともなくていいんだけどさ……」

「いえっ！ それじゃ私の気がすみません！ なにかお礼できればいいんですけど……」

「あー…ならさ、イベリアの街のギルドまで案内してくんね？ ギルドに登録したいんだわ俺ら」

「そ、それだけでいいんでしょうか……？」

「十分だから気にすんな。おーい忌月ー、そろそろ行くぞー？」

すっかりバテてしまっている忌月に声をかけると、おあー…と弱々しい声をする。なんとか立ち上がるも、歩くのがふらふらだった。なあお前の体力本当いくつなんだよ。

「た、体力回復の魔法なら私使えますよ？」

「体力回復？」

「はい、私治癒魔法が得意で…、かといって効果はあまりないんですけど……」

「まあいいや、かけてやってくれるか？」
「は、はい！」

セフィルはとたと忌月の前に行くと、背中に手を当て、目を閉じる。微かに魔力がふわり、と浮かび上がった。

「治癒魔法回復系第十三章【休息^{レスト}なれ】」

緑色の光がセフィルの手から淡く零れ粒子となって変換される。時間にして数秒。セフィルが手を離す頃には忌月の汗も引いていた。

ちなみに魔法の名前の前に言っていた言葉は詠唱ではない。もう少し力をつければそれも短縮できるのだが、あれは本から得た魔法にありがちなことだった。

詠唱ではないが詠唱と似たような効果もあり、違いもいまいちわからない。けれどウェイブがそう言っていたからそうなんだろう。

「あー…ずいぶん楽になった…、ありがとー、せ、せふいるさん」
「？ はい」

「もつと鍛えろよ？ さすがに俺も泣けてくるレベルだね。なんか哀れみ系で」
「エンド！」

酷いよっ！ と言ってくる忌月の頭をチョップして、なら頑張れ、とだけ言っておく。こいつは優しい奴だし、魔法を使うのも上手かった。きつと努力もするだろう。

「セフィル、じゃあ行くか？ 案内頼んだ」
「わかりました！ ご期待に沿えるよう努力させていただきます！」
「…そんな真面目腐った口調やめない？」

とりあえずセフィルを先頭にして、俺達はイベリアの街に入る。そこはずっと昔のヨーロッパのような風景で、思わず目を瞠る。けれどなんとなく思う。これはまったくの別物なんだなあ、と。しばらく進み続けると市場も見えてきた。美味そうな飯の匂いが鼻をくすぐる、が今は違う違う、と頭を振って入れ替える。

「賑やかなんだねー…」

隣で忌月がぼそりと呟いた。

「いいんじゃないか？ 俺は活気あるほうが好きだぞ？」

「まあ楽しそうだね」

「ふふっ」

そんな当たり障りのない会話を俺達はした。

人々はやはりなんていうかファンタジー。髪の色とか瞳とか。それだけじゃなくまんま見た目が狼の人とか、猫の人とか、なんかいろいろな人がいて面白い。

なんかいかにも冒険者のように大剣背負ってたり、魔法の際に使うようなごつごつした杖を引っさげてたり、さまざまだ。

柄の悪いような人たちもいたけれど、それはあまり係わり合いにならないでおこう。そういう人もつき物だってことは理解できるが、進んで交流するほど馬鹿じゃない。

「あ、見えてきましたよ！ あそこがギルドです」

「へえー…あそこか…」

「私も登録してるんですよ？ まあでも、難しいのは無理ですけど…」

見たのは大きな建物。入り口の横にはギルドの看板が取り付けられている。

冒険者らしき人たちがそこから出たり入ったりしていて、いかにもだ。

「じゃあ行くか。セフィル、ありがとな」

「いえ！ お役に立ててよかったです！ また必要なときがあったらかけつけますので。ではさようなら、エンドさん、キゲツさん！」

「ああ！ ……って俺エンドじゃなっ！」

「じゃーねー」

「…この全ての元凶が…！」

「へ、え、なにがだよ？」

「…もういい！ 行くぞ！」

「あ、うん…」

腑に落ちないという顔をした忌月を引っ張ってギルドの中に入る。入り口のすぐ横に受付らしきものが見えたので、そこに直行する。

「あーあの、ギルド登録したいんですが…」

「はい？ 登録でしゅっ、か？」

「……」

「……」

「……」

「噛みました」

「あー、うん」

真面目そうなうえに無表情で言われた。そしてかなりの美人さんだった。黒髪を高く結い上げていて、きちっとしたポニーテール。緑色の少しつりあがった瞳に、銀色のフレームの眼鏡をかけていて、鋭利そうな雰囲気がある。

ギャップと言う奴か…？　と思案していたら無表情な顔が怪訝そうに歪められた。

「…登録しないのですか？」

「あー登録しますします！　ほらエンド、早く」

「わかったわかった…」

「ではまずここに名前を記入してください。それからギルドの利用規約です、契約書にサインを」

「はいはい…」

言われたとおりに書き進める。

「書き終わりましたか？　それでは用紙をこちらに。次はこの水晶に血を一滴垂らしていただけますか？」

「うっ、…まあそういうもんだよな」

「どうしたの？」

「いいや…、お前は平気そうだな」

「はあ？」

一緒に出されたナイフで指を切りつける。いやはや、自分で自分を傷つけるのに結構勇氣はあるだろ…。ちなみに忌月は平然とやってのけていた。…ちくしょう。

ぼたり、と血が水晶についた瞬間一瞬だけ光り、血の後は跡形もなく消えている。

「登録完了しました。あと、これがカードになります」

「はいはい…って早いんだな…」

「か、かあど…かあどね。うん」

「……？」

「あー気にしないで。そういえばお前名前なんていうの？」

「イクシ・ラメットと申します。他に質問はありませんか？」

「あーないだろ。うん、だいたいはわかるし」

「了解しました」

やはり真面目だ。

依頼と系目の少年

「…そういえば、貴方たちは二人で依頼などを？」

「ん？ そうだけど？」

「でしたらパーティとして登録したらどうでしょうか」

「…そのつもりだけど…、登録？」

「ええ、そうしたこちらとしても正直楽ですので」

「…はつきりそんなこと言うんだな…」

無表情でそんなことを言うものだから愛嬌があるのかないのかわからなくなってくる。美人さんには違いないんだけどさ。

「登録するならパーティ名を決めてください」

「え、名前つけるものの？」

「そうしないと区別がつかなくなるでしょう？ 別々に依頼をこなしたとしてもそのパーティの成果となるのであなた方も都合がいいかと。あとから人を加入させることも可能です」

「うーん、名前か…」

特に俺にはネーミングセンスないし…、忌月になんかいいのあるか？ と聞いたらエンドが決めて、と丸投げされた。とりあえず足を踏んどく。ふぎやつとか悲鳴が聞こえたけど気にしない。
名前…俺達に関係するものとか…、…死んで転生して…。

「あ、そうだつ、これでいいか」

「エンド？」

「<コンティニュー>で登録します！」

「え、？　こ、こんでぬ？」

「了解しました」

「え？　え？」

どういう意味かわかっていなさそうな忌月を放っておき、俺は手続きをする。

紙にすらすらと文字を書きながら、なんとなく思っけれど、正直、俺は今ワクワクしている。これからのこの世界で生きていくことに対して、だ。

もちろん前の世界への恋しさはあるし、家族に会いたい気持ちもそりゃある。間違いだか罪に早く気付きたい。

けれど、だからといって、この世界を嫌えるわけじゃないのだ。忌月だってウェイブだって、いい奴がこの世界にいる。まあまだまだなにもわからないような俺だけれど、それでも、精一杯やっていけたらと思うのだ。

今俺らは、壁に貼られた以来の数々を眺めていた。いや、主に俺ばかりなのだが、ちなみに今の自分の様子。

「料理料理料理……料理料理料理料理……」

…おそらく、おそらくだが、今の俺の状態はおそらくたいそう不気味なものなだろう。引き気味の苦笑の声が忌月からしているし、

自分にも自覚はある。

けれど、だ、考えてもみてほしい。経験のない自分がいきなりモンスター討伐のような依頼が出来るだろうか。背伸びして無理な依頼をこなすより、こういう身の丈にあったものを探す方が…、

「本音は？」

「今すぐ料理したい俺の両手が疼く辛抱ならん」

おつと口を滑らせてしまったようだ。いささか厨二病に近い言動もした気がするが気にしたら負けだ。

俺の言葉を聞いて忌月は思いっきり呆れた顔をしたが、特に文句もないようだ。さすがにいきなりモンスター討伐は無理だと忌月自身も思っているようだ。

「んー？ キミら新入りくんか？」

「んあ？」

「へ？」

いきなり声をかけられて、振り向くとそこには青髪に糸目の同い年くらいの少年がいた。周りのごつごつとした大人の冒険者達と比べると、少し異質のように感じる。けれどよくよく考えれば俺達も似たようなものだし、俺達くらいの歳の人たちも他にもいそうだった。けれどいきなり話しかけてきたことに驚き、俺と忌月は顔を見合わせる。

「…えーと、新入りです、はい。お前は？」

「ボクはロストいうん。よろしくなあ」

…ん？

「えーと、俺忌月って言います、こっちはエンド」

「あ、おい」

「なるほど、キゲツくんToEndくんな、よろしく」

「こちらこそ、え、えと…ろすと、さん」

「発音おかしいような…まあええわ、さんづけはいらんで？」

…俺はEndじゃねえ、と言おうとも考えた、けれど、その前に…、

「か、関西弁っ！？」

「かんさいべん？」

「なんやそれ？ なんかの弁当か？」

関西弁は日本語じゃねえか！ なんでそんな風に変換されるんだよ！
…いや待て、外国でも地域によってなまりがあるらしいから…、こ
こでもそんななりにそ沿って、俺の知ってる言葉のうちに反映さ
れる…とか？

ああもう深く考えるな考えたら負けだ！ 異世界なんだからここは！

「ああーそうそう、そういえばキミな、さっき料理やらなんやら言
つとつたやろ、その依頼^{クエスト}受けたいん？」

「あ、ああ…、とりあえず料理したくてたまらない」

「…End…」

「…なんや変わった子やなあ…、くくつ、気にいったわ。料理の依
頼なら確かここらへんに…ほら、あったで？ 上から違うの貼られ
とつたからなあ。これ、『料理人募集』の依頼」

「お…まじで！？ ありがとう！ 忌月、行くぞ！」

「え、ちよつと、まず受付の人に言わないと…！」

「あ、そうだった、言ってくるな！

だつと駆けていく俺。そんな俺の後ろで会話が聞こえた。

「エンドくん面白い子やなかー、君らいつから一緒なん？」

「ついこの間からですよ。…俺もエンドのこと、すごいって思うし、尊敬してるんです」

「尊敬？」

「ええ、…俺は、きっとエンドみたいになれないですから」

なにやら俺のことを話しているようだったが、気にせず受付のイクシイに依頼のことを話す。俺のテンションの高さに変な顔をいていたが、事務的に受理をしてくれた。

俺は渡された用紙を持って忌月の元へと向かう。

「やってきた！ …けどお前は どうする？ 料理したいの俺だけだけど…」

「まあ付き合うよ。パーティー組んだんだしさ」

笑って言う忌月。わかってたけどやっぱりこいついい奴だな。

「まあお二人さん頑張つてなあ、ボクはボクのやることがあるから行ってくるわ。エンドくん、キゲツくん頑張つてな」

「はい」

「…結局俺はエンドなのか…、どんどんエンドが広まってくのか…」
「どうしたの？ エンド？」

「…もうどうでもいいや、忌月、さっさと行くぞ！ 場所はサニー食堂だ！ ほら早く」

「あ、待ってよ！」

料理、料理料理料理！！ なにか作れるのだろうか、料理人募集と言っくらいだ。

俺は胸をワクワクさせながら、忌月を置いていく勢いで走り出した。

依頼と糸目の少年（後書き）

パーティ名決定。

とにかく料理がしたいようです。

頑固親父と料理人

「断る」

店に入り、依頼を見せて数秒。頑固そうないやにたくましい店主に断られました。

「ってはい！？ いきなり断るってどういうことっすか!？」

「どうしたもこうしたもねえよ。こんなガキに包丁なんか持たせられるか」

「なにおう！？ 俺は料理したくてここまで来たんだよ！ それなのに料理の腕も見ずに帰れ？ んなのありかよ！」

「腕？ お前みたいな経験もなさそうなガキに厨房は任せられるか！ 他の奴を呼んで来い！」

この頑固親父、聞く耳持たねえ…。

口調は乱暴な亭主だったが、おそらくこのおっさん自身が作ってあるだろうこのサニー亭の料理は美味そうだ。実際に食べてはいないが、料理の匂いが違う。素材本来の旨みを生かして、余計な調味料を使用していなさそうだ。このおっさんの腕もかなり良いんだろう。

で・も！ それでどうして俺に料理をさせてくれないんだ！ ウェイプのところでこの世界の食材についてすごく勉強したさ！ モンスターや魔法のうんぬんかんぬんよりも頭の中にスムーズに知識として入ってきた。それに忌月やウェイプにも絶賛されているんだ！

「だめなものはだめだ！ さっさと出て行け！」

「見た目で判断するなよ！」

「はんっ！ お前みたいなのがなにを言ってる！」

「さつきからガキガキガキって……！」

さつきから堂々巡りだ。けれどこのおっさんは本当に頭が固そうだから、もしかしたら無理なのかもしれない、と諦めの気持ちが湧く。それに気付き、いけないいけない、とその考えを打ち消した。

「あのー……」

「お前みたいなの奴に任せられる料理はない！」

「だから実際に見ろって！」

「見んでも想像つく、……お前見れば新入りの冒険者じゃないか？」

つは、こんなことしてる暇があったらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか？」

「なんだと……っ！？」

「あのおっ……！」

一瞬頭に血が上りかけたが、忌月の声ではっと我に返る。親父に怒鳴られてから、忌月はさつきから困ったような顔でおろおろしていたが、意を決したように大声を上げた。

「なんだあ？」

俺と同じように怒りで我を忘れていたおっさん。忌月にかける声も些か怒気孕んでいた。

「……亭主さんって、顔怖いし、背も高いし、声低いし、力も強そう

だし、なんていうか、料理人には見えませんよね…」

「はあ？」

「…なんだと？」

おいおいおい、火に油注いでどうするんだよ、と声に出そうとする前に、おっさんが前に歩み出た。

「俺を馬鹿にしてるのか…？」

「すぐ怒鳴るし、威圧感あるし、料理人っていうよりは冒険者ですよね…」

「…てめえ」

「つまり、貴方は料理人に見えません」

「忌月うっ！？」

「…余程俺を馬鹿にしたいようだな…？」

おっさんの顔がまじで怖い。極道のような見た目のうえに声も低くその声で怒られるのはまじで怖い。

けれど忌月はおっさんから目を離さずに堂々と立っていた。

「あなたが俺達のことを見た目で判断したから、こちらもあなたの対応と同じ返しをしただけです、それで問題があるというのですか？」

「ばちくり、と。俺は一瞬忌月が何言っているのかわからなかった。

馬鹿だからじゃない、びっくりしたただけだ。

確かにおっさんは俺のことを見た目だけで料理が出来ないとか厨房に入るなとか、そんなことばかり言っていた。正直俺も良い気分じゃない。けれど、それはおっさんの方にも確かに言えることだ。

「俺達の歳で経験が浅いと思えるのも本来おかしいはずですよ。それ

ならあなたは、一度も料理したことがないけれど成人した人になら料理を任せられると？ 厨房に入れられると？ あなたはそう言いたいのですか？」

「んなわけ……」

「なら余計な先入観は取っ払って考えてください」

……なんだろう、忌月。

俺、料理したいだけなのに、なんでこんな状況なんだろう。

忌月の言っていることは正論。これに言い返すことなんてできないだろう。お前口喧嘩強かったのか、……いや、これは喧嘩じゃないか。お前怒ってないし。

「お願いですから、見た目だけで全てを拒否してしまうような、視野の狭い人にはならないでください。俺の元いたせか……国では、主に女性が料理などを行っていて、それが当たり前だといつの間にか俺は思い込んでいたんです。

……でも、エンドは違いました。俺が思い込んだものを、自分から進んでやっていて、むしろ好きだとさえ言っていたんです。俺のいた国は男尊女卑の風習が強く、女性が行っていた家事を、好きだからやっている、と知って俺は驚きました。

……あなたも、料理は好きでしょう？ そのことを、わかってください」

なんていうか。

なんていうか、俺は忌月の元いた世界のことはまったく知らなかった。教えてくれなかったし、あまり言いたそうじゃなかったから、俺も聞かなかった。

けれどそういう風習があって、でも、俺のことでそれを改めてくれて。

……なんていうかなあ。

すっげえ嬉しいわ。

「……俺も頭に血が上っていたようだ、すまない」

「え、えあ、はい……」

…謝られたよっ！？ 忌月すげえ…。このときばかりはまじで忌月を尊敬したね。

けれどまだ忌月の顔は曇っていた。そのことに俺が眉を顰めるまえに、忌月の口が開く。

「…先ほどの言葉…」

「…ん？」

「『こんなことしてる暇があったらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか？』…という言葉について、謝罪してください」

「おい、忌月？」

一字一句間違わずに覚えてたのかよ？ と、あまり関係ない突っ込みを脳内で繰り返す。

「…これはエンドのことじゃなくて、あなた自身の仕事のことに関しても、侮辱しています。人を蔑んで、そのうえ自分の仕事を馬鹿にしてるんですよ？ いくら頭に血が昇って言った言葉だとしても、それはあなたにとって許せる言葉ですか？」

ここで気付いた。多分、この言葉に関してだけ、だけど、恐らく俺に向かつて言われた、このおっさんにとってまったく関係ない暴言。…理不尽な言葉。

これに対して、忌月は少し、怒っている。

「…エンドはモンスター退治に怯える臆病者じゃない。」

してください。」

謝罪、

頑固親父と料理人（後書き）

忌月くん怒りました。怒ると怖いんです、多分。
多分エンドくんぽかーん状態です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Rollとコンティニュー

2011年12月25日21時53分発行